



Title	演劇を通じた居場所づくり活動の事例研究
Author(s)	
Citation	令和5（2023）年度学部学生による自主研究奨励事業 研究成果報告書．2024
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/95147
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

令和5年度大阪大学未来基金「学部学生による自主研究奨励事業」研究成果報告書					
ふりがな氏名	ほし みすず 星 美鈴	学部 学科	文学部	学年	2 年
ふりがな 共 同 研究者氏名		学部 学科		学年	年
					年
					年
アドバイザー教員 氏名	永田靖	所属	大阪大学中之島芸術センター 大阪大学文学研究科演劇学研究室 ／アートメディア論コース		
研究課題名	演劇を通じた居場所づくり活動の事例研究				
研究成果の概要	研究目的、研究計画、研究方法、研究経過、研究成果等について記述すること。必要に応じて用紙を追加してもよい。(先行する研究を引用する場合は、「阪大生のためのアカデミックライティング入門」に従い、盗作剽窃にならないように引用部分を明示し文末に参考文献リストをつけること。)				

「演劇を通じた居場所づくり活動の事例研究」

演劇学専修 2 年

星美鈴

1. 研究目的・研究動機

私は新型コロナウイルス感染拡大を受けて貧困問題がメディアで頻繁に取り上げられるようになって以来、日本の子どもの貧困問題に関心をもっており、特に、貧困から生じる問題のなかでも体験格差¹が大きな課題だと感じている。そして現在は、演劇を通じた活動を実施し、演劇を通じて子供たちを支援するような居場所をつくることでこの格差を縮小できないかと考えている。格差縮小に演劇を用いようと考えているのは、私自身が大学で演劇学を専攻しており、大学での学びを生かした支援をできるのではないかという想いと、演劇という、演技だけにとどまらず音響編集などの裏方作業や制作といった表方作業まで、多様な要素が組み合わさった芸術を用いることで、子どもたちが様々なことに挑戦するきっかけを作れるのではないかという想いがあるからだ。しかし、上記のような想いはあるものの、私は演劇を通じた子ども支援についての事例をほとんど知らず、また居場所づくりに関する知識も非常に浅い。そのため本研究では、演劇を通じた支援や居場所づくり活動の様々な事例を調査収集することを目的とした。加えて、演劇を通じた「居場所」の事例のポイントについて、インタビューを通して得た運営者の声を主に参照しながらまとめることで、団体の HP 等には掲載されていない、運営者の演劇制作に関する考え方や運営時の工夫を明らかにし、芸術を通じた居場所づくりに関するほかの研究の一助となることも期待している。

2. 研究方法・過程

先述したように本研究は私自身の「演劇を通じた居場所づくり」ビジョンを模索、作成するための情報収集を主な目的にし、フィールドワークを中心におこなった。研究の流れは次の通りだ。まず、2022 年 6 月から筆者が個人的にボランティアとして活動に参加している「ごはん処おかえり」の店主上野敏子さんに、支援活動を行う中で感じる課題について聞き取り調査をおこない、これからの「居場所」に必要な要素を抽出した。そしてそれに基づいてフィールドワーク先を選定し、子どもの貧困支援、また演劇を通じた支援の実践に取り組む団体や個人のもとに出向き、自分がどのような「演劇を通じた居場所」をひらきたいのか考えていくための参考事例を集めていった。以下、フィールドワーク・聞き取り調査を実施させていただいた団体・個人について簡潔にまとめた表を示す。次節からは、上野さんへのインタビューの要点と、表内の団体/個人のうち、演劇を活動の中心に据えていた団体/個人（放課後るび・仙石桂子准教授・しょうない演劇部・TFT）への調査から得た情報をまとめ、

¹学校外での学習や野外体験、レクリエーション活動、国際交流活動 といった「体験活動」に生活困窮家庭の子どもたちがアクセスしにくいという「格差」の問題のこと

参考：[PowerPoint プレゼンテーション \(cfc.or.jp\)](https://cfc.or.jp/) [公益社団法人チャンス・フォー・チルドレン, 2023]

記述していく。

日時	場所	①活動内容②インタビュー回答者
7/7	ごはん処「おかえり」	①豊中市庄内にある多世代の地域食堂「ごはん処おかえり」 弁当の無料配布や生活相談など活動は多岐にわたる。 ②店主 上野敏子さん
8/9	放課後等るび	①兵庫県神戸市の放課後等デイサービス施設。演劇療育を実施している。 ②代表者 大平正寿さん
8/25	NPO法人ミュージックサポート ネットワークばびぶべ	①香川県観音寺市で「音楽と食の居場所」を運営。 ②代表者 大宮多恵子さん
8/28	四国学院大学 准教授 仙石桂子さん	①就労継続支援B型事業所におけるワークショップの実施や、 施設利用者と大学生が協働して演劇創作を行う取り組みを実施 する。②仙石桂子さん
9/2 10:00~12:00	しょうない演劇部	①豊中市庄内 庄内コラボセンター「ショコラ」で子どもたち対 象に演劇ワークショップを実施。 ②主催者 勝川智正さん
9/2 17:00~	Teenagers' Free! Theater (TFT)	①兵庫県神戸市の「ちょっと学校に行きにくい10代のための演 劇サークル」 ②代表 井尻聡子さん、スタッフの方々
11/18- 11/19	犀の角	①長野県上田市にある。劇場施設とカフェを持つ<シアター> と<ゲストハウス>からなる民間の文化施設。 ②運営者 荒井舞さん スタッフ 村上梓さん

図 1 フィールドワーク実施団体/個人

3. 支援の現場からみえる課題ー「ごはん処おかえり」でのインタビューー

本節では、「ごはん処おかえり」（以下、おかえりと記載）の概要と筆者とのつながりについて説明した後、インタビューから得た学びをまとめていく。

3.1. 「ごはん処おかえり」について²

おかえりの店主 上野敏子さんはもともと路上生活を送る人たちへの炊き出し活動を仲間とともにしていた。だが活動を続けていくうちに、本当に支援が必要な人に届きにくいのではないかという思いが芽生え、地域の課題を考える仲間が増やしながら、しんどい人を支援できる飲食店をやってみようと、2019年9月におかえりをオープンした。営業時間中は20歳以下の子どもはいつでも無料でご飯を食べることができ、テイクアウト販売しているお惣菜はすべて100円で販売している。また、生活が苦しい大人は、店先に張り出されている「お福分け券」を利用するとお惣菜5個（500円分）を持ち帰ることができる。このような食を通じた支援はおかえりの店舗内だけにとどまらず、今年の夏休み期間（2023/7/21~8/24）に日曜日・祝日と台風の影響を受けた日（8/15~8/17）を除いて毎日実施された、庄内コラボセンター「ショコラ」³での無料弁当配布に代表されるように、地域の施設や団体と連携した活動も数多く行っている。また、おかえりの店舗の二階はフリースペースとなっており、訪れた子どもが自由に遊んだり、勉強したりできる。

2.2.2.筆者と「ごはん処おかえり」との関わり・インタビューの目的

筆者は2022年6月に「ごはん処おかえり」で開催された子ども向けのイベントに参加して以来、お

² ごはん処おかえり HP を参考に記述

³ （[庄内コラボセンター「ショコラ」](https://city.toyonaka.osaka.jp/) 豊中市 (city.toyonaka.osaka.jp))

かえりでボランティアをしている。1年以上おかえりでの活動やそこを利用することもたちと関わる中で、精神的に安心できる居場所と関係性の重要性を実感してきた。おかえりで一緒に遊んだり、バーベキューに出かけたりしているときは悩みなどなく、家庭でのしんどさとは無縁であるかのように見える子どもが、本当は深刻な問題を抱えていたのだと後から知ることが多々あったからだ。おかえりのような安心できる場所では穏やかに、素直にふるまえても、学校や家庭ではそうもいかない。部外者からは見えにくい課題を抱える子どもたちを見守り支援する上野さん自身の問題意識を知り、どのような人を対象とした居場所づくりをする必要があるのか考えることがインタビューの大きな目的であった。

3.2 インタビュー

おかえりの店主 上野敏子さんへのインタビューは2023年7月7日19時から、おかえりの店内でおこなった。一時間以上に及ぶインタビューの中では、支援の現場で感じる課題を中心に、おかえりの運営形態やおかえり設立準備期間についてなど様々なことについて伺ったが、ここでは、支援をおこなうなかで上野さんが感じる課題として①親の困りごと②発達障害をもつ子ども③18歳以下の、所属がない子どもについて記述する。なお、項の始めに上野さんの言葉を参照したのちにそれについての考察を記述していく形式をとっており、内容を分かりやすくしたり個人情報保護したりする目的から一部内容の省略・表現の簡略化や補足をおこなっている⁴。

3.2.1. 親の困りごと

「親の困りごと」って一口に言ってもやっぱりいろいろあんなんだけど…。あのコロナ渦で（中略）親の仕事もいろいろ制限かかって（中略）結局みんな、親も子もストレス「しか」ない。その状況でずっときて、拳句の果てには暴力沙汰やろ。（中略）その背景とか見てたら、やっぱり親も子もしんどいよねって。かといってうちら民間ができることって何もないわけ。ほんまに、できる事って話聞くことぐらいやん。つなぐとこつないだところで、っていう感じやからさ。（中略）結局、児相（筆者注：児童相談所のこと）と学校と市が連携してないからさ。ぶつ切りやもん。情報が。（中略）でも、やっぱり、そこに、お母ちゃんの「助けて」って言える力をつけることで、打開策が見えてくるケースもある。

ここからは、上野さんが

- ・コロナ渦を機に親も子どもも多大なストレスを抱え続ける状態が顕著になっている
- ・民間の支援団体が支援できるのは、親子の話をきくこと程度である
- ・児童相談所と学校と市の連携がうまくいっていないため、相談者をそれらの機関につないでも有効な解決策を見つけられる可能性は低い

と考えていることがわかる。また最終部の「お母ちゃんの助けてって言える力」とは、錯乱状態になって子どもを虐待してしまった親が自ら警察に電話をしたことで子どもの迅速な保護につながった事例を示しているのだが、これは、おかえりのような民間団体が単に公的機関へとつなぐという支援ではな

⁴ 以下、他の章におけるインタビューでも同様。

く、相談者自身が支援機関へ踏み出す力をつける手助けをするという、支援のもう一つの在り方を示しているといえだろう。

3.2.2 発達障害をもつ子どもと不登校

やっぱり、学校の先生が子どものその特性をまったく理解できてない。実際ある学校の校長が言うてたんは、「僕らは教育を売るのが仕事であって、福祉も医療もわからんと。何とかして助けて」って言われた。(中略) そんなことを考えたら、やっぱり今の学校の制度自体が子どもに合っていないちゃうって。それを裏付けるのが不登校(児童生徒)の増加。(中略) フリースクールとかに行けてる子はいいいけど…。受け皿が少ない。だからみんなこういうところに来る。

上記では省略しているが、発達障害に対する学校教員の理解のなさを、上野さん自身も発達障害を持つ子どもを育てていることから、実体験を例に出しながら語ってくださった。このお話から読み取れる課題は

- ・学校関係者の、発達障害についての知識不足
- ・現行の学校制度と相性が良くない子どもたちの受け皿となる場所の不足

であると言えるだろう。

3.2.3. 18 歳以下の、所属のない子ども

あと、ここから見えてるのはその中学校卒業後、高校進学して途中でやめてしまった 18 歳までの所属がない子たち。(そういう子どもたちは風俗にはしったり、空腹ゆえの犯罪がきっかけとなって犯罪グループから抜け出せなくなったりしているのだから) やっぱり、「働く場」と「居っていい場所」って、作らなあかんよね。(中略) そういう子どもの親もまた、同じような家庭環境で育ってきたから、どんな風に子どもを育てたらいいかわからない。大きな原因は、家族っていう大きな仕組みが崩壊していること。だから、(貧困の)連鎖を止めようって、子ども食堂やってる場合ちゃうねんて。確かに子ども食堂やって(多くの子ども食堂が対象としている)小学校低学年や中学年その辺りの(年代の)子どもをしっかり捕まえて中学高校って後追いできればいいけど。ここみたいに。

(おかえりには、小学校4年から中学3年になった今でも来ているこどもがいるが、その理由は) 慣れてるから。その子どもの口コミで、他の、しんどい思いをかかえた子も来るようになってる。

以上からは

- ・18 歳未満の、所属がない子どもたちの「働く場」と「安心できる居場所」の必要性
- ・「家族」という枠組みが崩壊していくなかで、いわば家族の代替のような立ち位置で、幼いころから子

どもを見守り続けることができる「居場所」の存在の必要性

が読み取れる。また、長年おかえりに通っている子どもと信頼関係を築くことで、その子どもが連れてくる同級生、という新たな対象にも支援の輪を広げることができるということは注目に値する。

3.2.4. 子どもの経験値

昔よう子どもらに言ってたんは、「おかえりは大人の動物園」って。おかえりにはいろんな大人がいてるから見てねって。要はさ、親と学校の先生しか知らないっていう子も結構おる。(このような状態のうえ、親から暴力受けている子どもも、おかえりのような場所に来たら) いろんな大人を見れる。いろんな大人を見てもらうことで、あの子らの中の経験値をちょっとでも上げれたらなって。経験値マイナスくらいの子が多いからさ。とりあえずゼロまで、フラットまでもっていきたい、っていう狙いもある。

ここで「経験値」という言葉によって示されているのは、子どもが親と学校の教員以外の、多様な特徴を持つ大人と関わる経験、そして、たとえ親や学校の教員と安心できる関係を築けなくてもそのような大人しかいないのではなく信頼できる大人もいるのだと知る経験、といったものだ。つまり、

- ・多様な大人と関わる経験が不足している子どもが、大人と関わることができる場を作ることが必要とされていると言えるだろう。

3.3. まとめ

本節では「ごはん処おかえり」の店主 上野敏子さんへのインタビューをもとに、支援の現場の現状やそこから見える課題を探っていった。「居場所づくり」の観点だけに絞ってまとめると、インタビューからは、以下4点のことがこれからの「居場所」に必要とされているといえる。

- ・子どもだけでなく親を含めた精神的・経済的支援
- ・発達障害やその他さまざまな要因から、学校へ行きにくいと感じている子どもたちの居場所
- ・18歳未満の、所属がない子どもたちの「働く場」と「安心できる居場所」
- ・親と学校の先生以外の、多様な大人と関わる経験ができる場

おかえりでのインタビュー以降、これら4点との関連も踏まえて、フィールドワーク先を選定し、調査を実施した。次節からは、実地調査を行った団体の活動詳細や運営者へのインタビュー内容を整理し、筆者自身が「演劇を通じた居場所づくり」を行う際に取り入れていく要素を抽出していく。なお、フィールドワーク実施の順番通りではなく、内容の関連が強いものを順に取り上げている点にご注意いただきたい。

4. 発達障害と演劇—放課後るび—

本章では、兵庫県神戸市の「放課後るび」を運営する大平正寿さんへのインタビューから要点を抽出して記していく。

4.1.「放課後るび」の概要⁵

「放課後るび」（以下、るび と記載）では放課後等デイサービスとして演劇療育をおこなっている。ここでいう「療育」とは、個人の特性に特別に配慮をした教育のことを指しており、るびでの主な活動は、演劇活動と、利用者の希望を受けて導入されたコグトレとソーシャル・スキル・トレーニング (SST) である。半年を1期とし、その時参加しているメンバーに最も合った活動内容になるように每期、プログラムの見直しを行っている。なお、演劇活動を実施してはいるが、障がい者アートや俳優養成を目指していない点に留意したい。

以下の表は公式 HP より引用した、るびの一年の活動と、曜日ごとの一日の活動内容である。

1年の活動（2023年度の予定）			
4月	7期スタート 懇談会	10月	8期スタート
5月	新人公演（ゴールデンウィーク中に開催）	11月	懇談会
6月		12月	アトリエ公演（23日～）
7月		1月	一人芝居「自画像」公演（6～8日）
8月	本公演（下旬）	2月	
9月	創作活動・アフターフォロー	3月	アトリエ公演（26日～）、アフターフォロー

図 2 放課後るび 年間スケジュール

月・水曜日の活動	
16:00～18:00	演劇活動（公演に向けてチームでお芝居を作ります）
18:00～19:00	自由遊び、舞台セット・小道具作成などスタッフ活動、宿題など（19時までには帰宅）
火・木曜日の活動	
16:00～18:00	作劇塾（公演用の台本を書くサポートをしています）
18:00～19:00	自由遊び、宿題など（19時までには帰宅）
金曜日の活動	
16:00～18:00	コグトレ・SST（参加している子どもに合った学習内容を行います。コグトレ、SSTをしています）
18:00～19:00	自由遊び、宿題など（19時までには帰宅）
土曜日の活動	
13:00～15:00	SSTゲーム・演劇活動（公演に向けてチームでお芝居を作ります）
16:00～18:00	SSTゲーム・演劇活動（公演に向けてチームでお芝居を作ります）
日曜日の活動	
13:00～15:00	SSTゲーム（SST要素のあるゲームなどを行います）・演劇活動（公演に向けてチームでお芝居を作ります）
16:00～18:00	SSTゲーム（SST要素のあるゲームなどを行います）・演劇活動（公演に向けてチームでお芝居を作ります）

図 3 放課後るび 曜日ごとのスケジュール

⁵ [放課後るび, 2023]

放課後るびは基本的に毎日開所しており、演劇活動時間は2時間である。ただ、演劇活動後も閉所時間の19時までのびで遊んでから帰宅する子どもも多い⁶。曜日ごとのチームに分かれて演劇制作をおこなっており、各チームに担当のスタッフがついている。この担当スタッフはいわば担任のような位置づけで、自分の担当チームの子どもたちの状況を最もよく把握している人物として他スタッフに懸念点を伝えたり、子どものサポートをおこなったりしてはたらく。スタッフは一日の活動の終わりにはその日の子どもたちの様子を記した日報を、月末には子ども一人一人について、るびでの活動の様子を記した月報を書き、保護者に渡す。図1の4月と11月の欄に見える、「懇談会」ではスタッフが保護者と話し合う場を設け、子育てについての保護者の悩み相談を受けるなど、保護者に対するアプローチもおこなっている。曜日ごとのチームについては、子ども自身で入りたいチームを決め、子どもたちが希望すれば複数チームに所属（複数の曜日に参加）することができる。また公演ごとにチームの移動も可能だ。

4.2. 大平正寿さんへのインタビュー

大平さんへのインタビューで核となった質問は2点ある。1点目は、行う支援の範囲について。2点目は、演劇制作時に求めるクオリティについてだ。次項以降この2点について記す。なお、るびでのインタビューは活動に参加しながらおこなったため録音をすることができず、大平さんご本人の言葉を引用することができないことをご寛恕いただきたい。

4.2.1. 行う支援の範囲

発達障がいや自閉傾向、ADHDなどの子どもを受け入れ⁷ている、るびの性質上、活動をしていく中で子どもたちが必要としている支援が数多く見えてくることが予想された。しかし、子どもたちにとって有益だと考えられる支援をすべて実施しようとしても時間的・金銭的不足がそれを阻むだろう。したがって、支援を行う/あえて行わない、という線引きをどのようにしているのかについて伺った。それについての回答では、子どもたちは1日2時間程度しかるびで過ごさないため、るびとして支援できることは限られている。つまり、いろいろな支援をやろうとしてもそれは不可能だということ。そのうえで、子どもの特性に合わせてアドバイスをし、よりよいコミュニケーションの方法を提示してあげるなど、2時間の中でできることを見つけていく必要があるのだとおっしゃっていた。加えて、支援の範囲という話題からは少しずれるが、運営についてのお話もしてくださった。それによると、芸術（演劇）と福祉を掛け合わせた取り組み近年よく見られるが、「放課後等デイサービス」という事業として実施する以上、どのように運営して利益を出すかを考える必要があり、その意味で「居場所としての位置づけ」をどのようにするかを十分考える必要があるとのことだった。つまり、ただのボランティアとして「居場所」を設け演劇活動を行うのか、利益を出すことを目的とした事業として、「演劇療育/演劇を通じた支援」を行うのか、によっても、運営形態や頻度、実施内容が変わってくるだろうということだ。

4.2.2. 演劇制作時に求めるクオリティ

⁶ [放課後るび, 2023]

⁷ [放課後るび, 日付不明]

前述のように、るびは障がい者アートや俳優養成を目指しておらず、Web サイト上ではより詳しく「きっちりと、最高の舞台を作り上げるように努力するでしょうが、そうするときが一番楽しいから、そうするのです。演劇を職業にする訓練ではありません。⁸⁾」と記されている。インタビューにおいても大平さんは、作品としていいものを創ろうとはするが、「子どもがどうすれば伸びるか」を主眼にして指導をおこなっていると述べていた。また、「演劇」療育を行う利点として、発達障がいなどによりコミュニケーションのしにくさを抱えている利用者は、演劇という、「筋書きが決まったコミュニケーション」の中では安心してコミュニケーションをとることができること。そして、その演劇をしているときの安心感のまま休憩時間に入り、仲間同士でコミュニケーションをとることができるようになる、ということを挙げられており、「安心できるコミュニケーションの場所」として演劇を捉えていると言えるだろう。

4.3. まとめ

るびでのフィールドワークとインタビューから、必要とされており、かつ、自分の団体でできる範囲の支援を見極めおこなうことの必要性和、演劇という定型的なコミュニケーションがもたらす安心感を見出すことができた。また、居場所づくりを行う際、その居場所をどのようなものとして位置付けるのかを明確に考えておく必要があることも学んだ。

5. 精神障がいと演劇

—四国学院大学 仙石桂子准教授の『ダンデライオンズ』にまつわるインタビューより—

本章では、四国学院大学の仙石桂子准教授が就労継続支援 B 型事業所「たんぽぽ」の利用者や四国学院大学の学生と協働で制作した『ダンデライオンズ』についてのインタビューより、制作時に目標とした点と注意した点に関して記述する。

5.1. 仙石准教授について

仙石桂子准教授は四国学院大学社会学部 カルチュラル・マネジメント学科に所属⁹⁾しており、演劇教育と即興演劇を専門としている¹⁰⁾。一橋大学勤務時には、学生、学外など様々な場所でワークショップを行い、シラチャ日本人学校では、国語科の授業の中にインプロを取り入れた授業を実践¹¹⁾。2014 年より劇作家、演出家としても活動し始め、年に二回のペースで新作を発表している¹²⁾。

5.2. 演劇『ダンデライオンズ』の制作

⁸⁾ [放課後るび, 2023]

⁹⁾ [research map, 2021]

¹⁰⁾ [四国学院大学, 日付不明]

¹¹⁾ 同上

¹²⁾ 同上

5.2.1. 概要¹³

仙石准教授は 2019 年から香川県丸亀市の就労継続支援 B 型事業所「たんぽぽ」で即興演劇のワークショップを開催していた。そんな中、発表の場を設けたいと、2022 年は利用者と学生が協働で演劇作品『ダンデライオンズ』の制作を行うことになり、仙石准教授は脚本・演出を担当した。『ダンデライオンズ』は 3 つの短編作品からなり、いずれも「たんぽぽ」の利用者の実体験を基にして書かれている。演劇制作に参加したのは「たんぽぽ」の利用者とスタッフ、四国学院大学の学生と卒業生、教職員ら総勢 50 人であった。舞台美術や音響、照明は外部業者の手を借りて負担を減らしたうえで、精神障害がある人を演じる学生たちは、当事者であり出演者でもある「たんぽぽ」の利用者と対話を重ねて演技を固めていった。

5.2.2. 制作時について

就労継続支援 B 型事業所¹⁴である「たんぽぽ」の利用者と演劇制作を行う際には子どもを対象にして演劇ワークショップ等の演劇活動を行うときは違った目標設定や配慮が必要なのではないかと私は予想した。したがってインタビュー時に「就労継続支援施設で演劇制作や演劇ワークショップをおこなう際に目標として設定したこと、また配慮したこと」についてお聞きし、いただいた答えの要点を示す。

5.2.2.1. 目標設定

目標設定、という点について、具体的には「ワークショップ時や演劇制作時に演劇によるセラピー的な効果をもたらそうとしているのか否か」を仙石准教授にお聞きしたところ、次のような答えが返ってきた。

ワークショップのときはその場で作るので、その場で楽しかったらいいし。(中略)(演劇作品制作時については)『ダンデライオンズ』という作品をつくったんですけど、セラピーっていう目的は全くなくて、私はその専門家じゃないし、人を治すことは私はできないと思ってるんですけど、演劇が。だから、どちらかというと、みんなで素晴らしい作品にすることに向かっていくことで、ある意味支える支えられるという関係が逆転する時がある。どっちが支えられてどっちが支えてるんだらうっていうことが、分からなくなるんですよ。そもそもスタッフさんとメンバーさん(就労継続支援 B 型事業所「たんぽぽ」の利用者)は同じ立場で、演劇が初めてだったりするわけだから、そういう場に一緒にいること自体がもうすでに、そこで対話とか(が生まれる)。学生たちがいるということで、(中略)演劇コースの子(四国学院大学の学生)たちも治そうとはしていない。演劇的なことは言いますよ。だけど、病気を治そうとか、この人は病気だっていう感覚はないとい

¹³ [KSB 5ch, 2022]と仙石准教授へのインタビューをもとに執筆

¹⁴ 就労継続支援 B 型とは、障害のある方が、一般企業に就職することに対して不安があったり、就職することが困難だったりする場合に、雇用契約を結ばずに生産活動などの就労訓練を行うことができる事業所及びサービスのことである。

[就労継続支援 B 型とは？B 型事業所や仕事内容・工賃\(給料\)についても解説【専門家監修】\(litalico.jp\)](https://litalico.jp/)

うか。(中略)「治そうとしないでくれ」っていうのは最初にみんな(学生たち)に言ってます。

仙石准教授自身は、演劇によるセラピー的な効果を狙った活動をおこなってはいない。むしろ、質の高い演劇の制作を支援者(支援事業所のスタッフ)と被支援者(支援事業所の利用者)また学生がともに目指すことで支援と被支援という関係性が逆転すること、そして支援者も非支援者も等しく未体験のことに彼らが一緒になって挑戦することにより対話が生まれることを重視しているといえる。

5.2.2.2. 配慮した点

就労支援施設でのワークショップや演劇制作時に注意した点や配慮した点については、基本的に無理をせずその日の体調に合わせて活動してもらうことや、活動が円滑に進むようなペアづくりをすることを挙げられていた。ただ、ペアづくり(グループ作り)についてのエピソードとして印象的なものがあったのでここで紹介したい。

ペア活動やグループ活動を行う際、そのペアやグループは仙石准教授が決めており、スタッフと就労継続支援B型事業所「たんぼぼ」の利用者の両方が混ざりあうように配慮していた。しかしある日偶然、スタッフのみのグループと、利用者のみのグループに分かれてしまっていた。やや危機感を感じつつもそのまま即興演劇を制作する活動を開始したが、最終的にできた作品としては、利用者のグループの作品のクオリティが非常に高く、想定不能で物語的な、すばらしいものであった。一方、スタッフだけのチームの作品は頭で考えすぎており、“教育”的な内容になっていた。この経験について仙石准教授は次のように述べている。

ああ私がそれ(利用者はスタッフがいないと演劇制作をできない、ということ)を自分で決めちゃってるんだと思ったんですよ。可能性みたいなものを。だから「ここまでしかなできないだろう」というようなことを思うこと自体がすごくナンセンスというか、ある意味バカにできてしまってることだったんだな、っていう風に思ったんです。

このエピソードやコメントからは、障がいをもっているから配慮しなければいけないという考えがもたらす弊害を見て取れる。この場合、障がいがある人は健常者のサポートを受けられるように調整したうえで演劇制作をする、という配慮は有効に働いてはおらず、むしろ作品制作の可能性を狭めるものになっていたのだ。障がいを持つ方々と活動する際は、参加者にとって必要な配慮は十分にしつつ、彼らの能力を勝手に決めつけ制限してしまうようなことはないように注意しなければならないと気づかされるエピソードであった。

5.3. まとめ

インタビューからは仙石准教授が、すばらしい作品の制作をめざして演劇活動を行うことで支援と被支援の関係性が逆転したり、対話が生まれたりすることに意義を見出していることが読み取れた。また、「障がい者」に対する「配慮」が参加者の創造性を制限する原因となる可能性についても考える事ができたが、演劇ワークショップ実施の際に一定の配慮は必要であるだろうと思われるため、その線引きに

については今後も検討していく必要がある。

6. 演劇を通じて大人と関わる―「しょうない演劇部」の“ゆるい”居場所づくり―

本章では大阪府豊中市庄内で活動する「しょうない演劇部」の活動に参加、また主催者の務川智正さんへのインタビューをおこなって知った、演劇を通じた居場所づくりの視点をまとめていく。

6.1. しょうない演劇部について

しょうない演劇部は、庄内コラボセンター「ショコラ」¹⁵にて月2回、土曜日の10時から12時まで、幼児～高校生の子どもを対象にして開かれる文化的居場所¹⁶である。以前は一回の活動に最大10名ほどが集まっていたが、参加者の中学校進学などが重なり、現在では最大で集まる人数は4~5名、継続的に集まっているのは2名程度となっている。参加する子どもは比較的少ない一方、ボランティアとして関わる大人は務川さん以外にも男性1人、女性2人おり、加えて「ショコラ」の職員も時々活動の様子をのぞいて子どもたちに声をかけるので、一回の活動に参加するだけで子どもたちは4人以上の大人と関わることになる。

6.2. “ゆるい”居場所づくり

「しょうない演劇部」の活動に参加し、また務川さんへのインタビューも実施して感じたのはこの活動のゆるやかさだ。活動自体月2回で参加する子どももそこまで多くなく、務川さん自身としては「しょうない演劇部」は「居場所」であるので来たい人が来たいときに来ればよい、という立場であるようだ。本項ではこの“ゆるさ”のなかでも演劇という要素をあえて取り入れている理由、また、地域の子どもたちと演劇活動を行ううえで務川さんら「しょうない演劇部」のスタッフの大人が子どもたちとどのように関わっているのかについて記していく。

6.2.1. 演劇を身近なものにする

月二回の限られた活動の中で、絵画でもスポーツでもなく、あえて演劇を通じた居場所をつくっている理由について、務川さんは次のように述べていた。

演劇は日常とは違う、非日常。物語を作るがゆえに、通常の関係でない現場を作れるから。現実とは違う第三の場所を作るという延長線で、アーティスティックで芸術的なものを創るという延長線ではなくて、(中略) 演劇が持つ、非日常性を作り出すという面を地域にすり合わせる。

(ドラマセラピーをしようとする) どうしても「ドラマ」っていう一個高いものところへいかないといけないので。もっと手前の部分の、「マツリ」。偶然に集まった人たちが求めていくもの。

¹⁵ 庄内コラボセンター「ショコラ」 豊中市 (city.toyonaka.osaka.jp)

¹⁶ [いこっと, 2023]

演劇が作り出す非日常性を、「芸術」という人によっては少し身構えてしまうような枠組みの延長線ととらえるのではなく、参加が強制されていない「しょうない演劇部」という居場所に偶然集まった子どもたちが地域のお祭りを楽しむような感覚で演劇を楽しんでもらいめるようにしたいという務川さんの想いを伺うことができる言葉だろう。

6.2.2. 自己表現が苦手な子どもと演劇

演劇を地域のお祭りに参加するような感覚で楽しむことは確かにできるかもしれないが、「演劇」を用いて活動しようとする以上、自己表現が苦手な子どもは参加しにくくなってしまうのではないかという問いを務川さんに投げかけたところ、このようにお答えいただいた。

演劇に関しては、「ごっこ遊びをしよう」というのが基本の流れ。（「演劇」という言葉を使うと）人前で何かやらなあかん、って思う。そうすると、引っ込み思案の子は、「やりたいけど、やりたくない」というアンビバレンスが起こるから、（「しょうない演劇部」では演劇活動の）発表会を想定した活動をしない。「ごっこあそびをしよう」と持ち掛けて輪を作る。そこから、「お芝居もやってみない？」と提案してみる。

「演劇」やそこから連想される「上演（発表）」という言葉は、人前に立つのが苦手な子どもを委縮させてしまい、演劇に興味があっても参加する勇気が出ない子どもをつくってしまう。それを避けるために、大部分の子どもが一度はしたことがある「ごっこ遊び」を持ちだして、「演劇」はとても身近なものだと気づいてもらうことで、演劇活動へのハードルを下げようとしていることがわかる。また、ごっこ遊びが苦手な子は、絵を描くなどの一人遊びをしてもらい、そこから演劇につなげていくのだとも述べていたことから、「ごっこ遊び」に限らず子ども自身が好きなこと、親しみのあることと演劇との間の類似性を見出し生かすことを重視しているといえる。

6.2.3. しんどさを抱える子どもたちとの関わり方

本節で述べてきたように、演劇を子どもたちにとってできるだけ身近で、親しみやすいものにしようとしている「しょうない演劇部」だが、精神的につらい思いをしている子どもが参加していた場合にはどのように関わろうとしているのかについて尋ねたところ、次のような返答をいただいた。

（子どもたちが）しんどいのはわかる。だからそれを一緒に考えながら、どうにかしようって言いながら、違うことで解消させていく。アートすることで何かの発散というか、考えるヒントを作ろうとしている。より間接的。だから学校の先生みたいに直接そこ（子どものしんどさ）にアプローチするわけではなくて、（中略）本人の考え方の間口を広げる。

以上から分かるように、務川さんは「しょうない演劇部」という居場所に集まった参加者のしんどさをくみ取って何か支援しようとはしていない。そのしんどさを受け止め、一緒に演劇という芸術活動をすることで本人の視野を広げ、子ども自らが困難を乗り越えられるような力をつけてくれることを理想と

しているのだ。また、子どもと関わるうえで、大人は一人間として子どもに向き合い、大人自身の考えをしっかりと述べたうえで子どもの意見をきちんと聞く、対話的な向き合い方が必要だとも述べられていた。

6.3. まとめ

「しょうない演劇部」では、演劇をより身近なものとして捉え直すことで子どもたちが活動に参加しやすくなるように工夫している。また、参加している子どもの人数に対して大人のスタッフの人数が多いため、子どもたちはスタッフとして参加する様々な価値観を持った大人と関わり、その価値観の一端を垣間見ることができるといえる。

7. 不登校児童・生徒のための、演劇を通じた居場所—Teenagers' Free! Theater (TFT) —

本章では、兵庫県神戸市で活動する Teenagers' Free! Theater (以下、TFT と記載) の代表である井尻聡子さんとスタッフの方々へのインタビューをもとに、「ちょっと学校に行きにくい 10 代のための演劇サークル」として活動する TFT における活動の考え方や、運営時の工夫をまとめていく。

7.1. TFT の概要¹⁷

Teenagers' Free! Theater (ティーンエージャーズ フリー シアター) 略して TFT (ティーエフティ) は、2005 年 9 月に兵庫教育大学の課外研究プロジェクトの一環として学生と地元の社会人が立ち上げた「ちょっと学校に行きにくい 10 代のための演劇サークル」だ。定員は年によって若干変動するが十数名で、応募者多数の場合は抽選となる。ここで面接のようなものを実施して選考を行わないのは、子どもたちの「学校には行きにくいけれど TFT で活動してみたい」という想いに、運営者側で優先順位をつけることができないからだ。年間のスケジュールとしては、毎年 6 月に参加者を募集し 7 月から 3 月まで活動している。活動自体は 3 月の修了式を迎えると一旦終了となるが、次の年度の活動に継続して参加することも可能だ。7 月から 12 月の演劇公演まではおおむね隔週土曜日に台本作りや練習をおこなっている。この練習では、「こうしなければならない」という縛りを持った練習ではなく、日々できることを積み上げていった結果としての演劇公演を開催することを重視している。12 月から 3 月の公演終了後の機関には月 1~2 回土曜日に集まり公演 DVD 鑑賞会や修了式に向けての活動をしている。

スタッフについては、毎年 5 月に 18 歳以上の学生・社会人のボランティアスタッフを募集しており、40 名ほどがスタッフとして登録している。子どもの定員が十数名であるのにスタッフを子どもの倍以上の人数で確保しているのは、活動時に子ども 1 人に対して 1 人以上のスタッフがつけるようにしていきたいからだという。

7.2. "10 代を"対象とした演劇サークル

前述のように TFT は対象者を小学 5 年生から 18 歳に限定しているが、これは幼児から高校生まで幅広い年代を対象としていた「しょうない演劇部」とは対照的である。インタビューでは、その理由や、小学 5 年生から 18 歳までを対象にして活動するうえでの工夫について伺った。

¹⁷ [Teenagers' Free! Theater (TFT), 日付不明]と、インタビューから得た情報をもとに記述

7.2.1. 対象年代を絞る理由

対象年代をティーンエイジャーに限定していることについての回答は以下の通りである。

人とやり取りをして物語を作るときに、相手に配慮できるのが小学5年生くらい。小学4年生に即興劇をやらせると、言いたいことをお互い言い続けて…（中略）全体に引いて見ることができるのは小学5年生くらいかなと。（中略）学校への行きづらさ、思春期のしんどさが出てくるあたりをターゲットにしたというのものもあるかなと。（中略）それ（小学5年生）くらいからだ、みんなある程度対等に関われるというか、「世話しなきゃ」とならず済むかなというものもあります。あんまり下（の学年）の子が小さすぎると、年上の、高校生くらいの子が我慢しちゃう。のびのびできない。

TFT スタッフの認識としては、相手に配慮したコミュニケーションができるようになったり、思春期に入ることによって学校に行きにくくなったりし始めるのが小学5年生くらいの年齢からであるらしい。また、年の差がありすぎることで、年上の子どもたちが年下の子どもたちに遠慮してしまい、のびのびと活動できなくなることを問題視していることは注目すべき点だ。様々な年代が集まって活動することのメリットは多い一方、デメリットも持つことに気づかされた。

7.2.2. 10代との関わり方

10代と一緒に活動するうえでの難しさについてお聞きしたところ、代表の井尻さんをはじめとする中年女性スタッフは、自分の子どもと同じような感覚で接している、とおっしゃっていた。それに対して、20代前半の女性スタッフは次のように話していた。

（TFTに参加する子どもたちに）気を使われているかもしれない。周りに敏感だったりする子は、スタッフにも気を遣う。（中略）砕けてしゃべったりとか、友達同士でしゃべる感じで、「一緒に楽しもうよ」という気持ちで過ごしているかな。そんなにしゃべらなくてもいいし。一緒に時間を過ごすとかでもいいし。ぼーっとしたりとか。しゃべりたそうやったら一緒にしゃべるとか。その場その場で友達らしく過ごす。

井尻さんらのように親子ほど歳が離れていると、子どもたちの側も親に接するのと同じ感覚でスタッフと関わるができるが、学校の先輩よりは年上で親よりも年下、という20代のスタッフと関わろうとすると、その微妙な年の差ならではの難しさを感じるのかもしれない。

関わり方の話に関連して、TFTでは学校へ行きにくいことからくる精神的なしんどさや課題を抱えたメンバーを外部の専門機関につなぐといった支援を行っているのか否かについてお聞きしたところ、そのような専門的な関わり方はしていないとのことであった。ただ、TFTの活動に参加している時間を楽しめるものにするために必要な配慮ができるよう、新たにTFTの活動に参加する子どもの保護者には、活動を開始する前に「参加者シート」の記入を依頼している。シートには学校に行きにくくなった経緯や障がいの有無、通院歴や苦手な物事などを記してもらい、適宜対応できるようにしているそうだ。専

門機関へつなぐ支援を行わない理由としては、つないだ先の機関が適切であるかどうか、スタッフでは責任を持てないこと、また専門機関から紹介されて TFT に参加するメンバーも多いことが挙げられていた。

7.3. まとめ

TFT では、対象年齢を下げすぎないことで「年上だから」と我慢する子が出ないようにすることや、活動時のスタッフは一緒にその瞬間を楽しむ友達のようにふるまうこと、また保護者への事前調査を行うなどすることで、10代という多感な時期の子どもたちにとって楽しく居心地のよい活動をできるようにしている。

8. 総括と今後の課題

本研究では、演劇を通じた支援や居場所づくり活動の様々な事例を調査収集することを目標とした。豊中市で多世代型食堂を経営する上野敏子さんへのインタビューからは、支援現場から見える課題として、①子どもだけでなく親を含めた精神的・経済的支援の不足 ②発達障害やその他さまざまな要因から、学校へ行きにくいと感じている子どもたちの居場所の不足 ③18 歳未満の、所属がない子どもたちの「働く場」と「安心できる居場所」の不足 という3つがみえた。また。親と学校の先生以外の、多様な大人と関わる経験ができる場の必要性も大いに感じられた。

演劇を通じた居場所づくり活動をおこなう団体/個人の基本情報やインタビュー内容についてはポイントを以下の表にまとめたので参照していただきたい。

	放課後るび	仙石准教授	しょうない演劇部	TFT
対象者	6~18 歳の療育が必要な子ども	就労継続支援 B 型事業所の利用者	こども（幼児～高校生）	小学 5 年生～18 歳
活動（開所）頻度	毎日	不明	月 2 回程度	月 2 回程度
演劇を用いた活動の意義	「安心できるコミュニケーションの場」の創出	支援する/されるという関係性の逆転	非日常性の創出	安心できる、楽しい居場所の確保
演劇制作への姿勢	最高の舞台を作り上げる	素晴らしい作品にする	発表を中心とした活動は行わない	参加者が日々できることを積み上げていった結果としての演劇公演

インタビューから得たポイント	・「居場所」の実施形態の明確化 ・自団体ができる支援の範囲を見極めることの必要性	「障がい者だから」という配慮が創作の可能性を狭めるという恐れ	・演劇をより身近なものとして捉える ・大人の意見を子どもにきちんと伝えて対話することの重要性	参加者の年代が幅広すぎることによる弊害もある
----------------	---	--------------------------------	---	------------------------

放課後等デイサービスとして経営されている「放課後るび」は毎日開所している一方、居場所として開かれた「しょうない演劇部」や「TFT」は月2回程度の開催であったり、楽しみながらも質の高い作品制作とその上演を目指そうとする団体が多いなか「しょうない演劇部」はそもそも上演を目標とした活動を行っていなかったりと、団体による違いはいくつか見受けられる。しかし、演劇による「治療」のような効果はどの団体も期待しておらず、参加者が安心して楽しんだりできる場をつくろうとしていることがわかるだろう。

私が今後、演劇を通じた居場所の構想を練っていくにあたって意識したいのは、次の3点である。1点目は、「居場所」をどのような施設として位置付けるのかという点だ。「放課後るび」の大平さんがおっしゃっていたように、演劇を通じた居場所を、放課後等デイサービスのような「事業」として行うのか、もしくはボランティア活動として演劇制作に特化した居場所を作るのか、または「居場所」としての居場所で不定期に演劇ワークショップを行うのか、など演劇の取り入れ方やおこなう支援の内容と程度も合わせて考えていきたい。2点目は、演劇を「ごっこ遊び」など子どもにとって身近なほかの遊びとの関連からとらえ直すことだ。居場所づくりへの演劇の取り入れ方はどうであれ、参加者が演劇そのものを楽しめるようにすることは不可欠であり、その際に「しょうない演劇部」の務川さんのように、演劇以外のものから、演劇的な側面を見出して演劇への入り口として用いるのは有効だと思われる。3点目は、自分がしようとしている「配慮」が本当に有効なのか常に注意しておくことだ。一見、障がい者の方とスタッフを混ぜてグループを作ったり、幅広い年代の子どもたちが集まるような活動を行ったりすることは参加者にとって良いことに思えるが、その配慮や工夫が逆効果になることが、仙石准教授やTFTへのインタビューで明らかになった。

本研究の課題として挙げられる最大の点は調査の不足だ。まず、子どもへの支援の現状について、「ごはん処 おかえり」を経営する上野さんにお話は伺ったものの、豊中市役所といった公的機関や他の民間団体への調査をおこなえていない。私は上野さんの活動に1年以上関わってその支援力を間近で見ており、彼女の言葉に信頼性があると判断していたが、それだけを参照したことにより研究としては説得力の欠けるものになってしまったと思われる。また、演劇を通じた支援活動の事例として取り上げる数も少なかった。今後は、これらの調査不足を補いつつ、新たに進めた調査や本研究で得た情報を参照して、演劇を通じた居場所づくりの構想を練り、実現へと進めていきたい。

参考文献

- KSB 5ch. (2022 年 6 月 20 日). 【特集】精神障害者の「生きづらさ」を演劇に 大学と就労支援施設の共同企画 香川・善通寺市. 参照日: 2023 年 12 月 11 日, 参照先: KSB 5ch: <https://news.ksb.co.jp/article/14649169>
- research map. (2021 年 10 月 7 日). 仙石桂子. 参照日: 2023 年 12 月 11 日, 参照先: research map: <https://researchmap.jp/www.sg-u.ac.jp>
- Teenagers' Free! Theater (TFT). (日付不明). TFT とは. 参照日: 2023 年 12 月 12 日, 参照先: Teenagers' Free! Theater (TFT) : <https://kobe-tft.amebaownd.com/pages/4828987/profile>
- いこっと. (2023 年 5 月 12 日). 【交流・体験等】しょうない演劇部. 参照日: 2023 年 12 月 12 日, 参照先: いこっと: <https://toyonaka-ikotto.net/2022/04/04/shonai-engekibu/>
- 公益社団法人チャンス・フォー・チルドレン. (2023 年 7 月 4 日). 子どもの「体験格差」実態調査. 参照日: 2023 年 12 月 16 日, 参照先: 公益社団法人チャンス・フォー・チルドレン: https://cfc.or.jp/wp-content/uploads/2023/07/cfc_taiken_report2307.pdf
- 四国学院大学. (日付不明). 仙石桂子. 参照日: 2023 年 12 月 11 日, 参照先: 四国学院大学: <https://www.sg-u.ac.jp/profiles/ksengoku/>
- 放課後るび. (2023 年 3 月 16 日). 放課後等デイサービスと、放課後るびについて. 参照日: 2023 年 12 月 8 日, 参照先: 演劇療育 放課後等デイサービス るび: <http://houkagorubi.com/>
- 放課後るび. (日付不明). ホーム. 参照日: 2023 年 12 月 9 日, 参照先: 演劇療育 放課後等デイサービス るび: <https://houkagorubi.com/>